



《画像磚》

I



《孔雀文磚》

II

研究報告

1. 本館所蔵の漢代画像磚について

画像磚 作者不詳 後漢（2～3世紀）

磚 1面 法量22.6×29.2cm

孔雀文磚 作者不詳 後漢（2世紀）

磚 1面 法量9.0×21.8cm

昨年、2019年6月に、香雪記念資料館で「再見！東洋美術展」を開催し、美学美術史学科の前身である博物館学課程の教材として、故松原三郎名誉教授が購入した東洋考古文物（現在香雪記念資料館蔵）と、東京藝術大学美術館から借用した石仏3点を併せて展示した。その際展示した、館蔵の漢代の画像磚について、展示に先立ち調査した結果、その一つとほとんど同じ図様をもつ漢代の空磚の一面が、天理大学附属天理参考館に所蔵されていることを知り、同館での調査の機会を得た。

ここでは、本館所蔵の画像磚とその特異な図様について、天理大学附属天理参考館での調査を踏まえ、目下知り得る範囲の先行研究をまとめ簡単な報告をしておきたい。

まず、本館所蔵の2件の画像磚の概要を述べる。1件は、縦22.6cm、横29.2cm、厚さ（最も厚いところで4.2cm）の、方形の明るい赤褐色の磚である。大きさと厚さから、空磚の一面を切断したものの一部分であると考えられる（挿図1）。もう1件は、縦9.0cm 横21.8cmの小さなタイル状の画像磚で、尾の長い、孔雀あるいは朱雀が凸線によって表現されている（挿図2）。描写や磚の土色などから、ほぼ同時期に同一のところで制作されたものと考えられる。ここでは、主に、大きい方の（挿図1）の画像磚について述べる。

画像磚の中央には、奇妙な男の姿が凸線で表されている。その左右には槍の先のような樹木が1対スタンプされている。漢代の画像磚に多く見られるもので柏樹と称される、針葉樹を表したものである。中央の人物は、まばらな髪が放射線状に逆立ち、見開いた目は瞳が丸く突出し、大きな鼻に、大きく横に開いた口からは大きな歯が見えている。肩を怒らせ、袖がハート型のように左右対称に膨らみ、体の前で両手を重ねている。毛の生えた脛を露わにし、踵を付けた足先は真横に開いて立っている。

その上方、人物のスタンプをT字の縦棒とすると、横棒の位置に、左側に朱雀のような鳥、それに対して振り返り走り去りながら矢を引く動物の頭をもった人が凸線で表されている。

磚の両端には、平仮名の「く」字を縦につなげたような、帯状の幾何学文がある。

画像磚の文様は、生乾きの磚の表面にスタンプを押して施される。この場合は、上部の鳥と獣面人、中央の奇妙な人物をそれぞれ線刻した矩形の板をスタンプして、人物の両脇には線刻した樹木型をスタンプし、両脇の縁文様が押されたものである。

磚の四周は、いずれも切り取られ、裏側は手を加えていないままである。灰色の磚本体に明るい赤褐色（肌色）の土が多く付着している。厚みがあることや大きさから、柱状の空磚の一面から切り取ったものと考えられる。それは、後に述べる天理大学附属天理参考館所蔵の例から推測される。

さて、中央の印象的な人物は、河南省鄭州出土の画像磚にほぼ同じ図様が見られる（挿図3）。その図の解説では、方相氏とする¹。方相氏は、『周礼』（夏官）に記載される周官で、熊の皮と黄金の四つ目仮面をかぶり、黒い衣と朱色の裳を穿いて、手に戈（ほこ）と盾を取り、百人の従者を率いて、追讎のときに室内を探して疫（わざわい）を駆逐する。王の葬儀に際しては、棺の先駆けをして、墓に至れば、塚穴に入り戈で四隅

を撃って、方良（罔両）を駆逐する（方相氏：掌蒙熊皮、黄金四目、玄衣朱裳、執戈揚盾、帥百隸而時難、以索室驅疫。大喪先柩、及墓入壙、以戈擊四隅、驅方良）という。ただ、この『周礼』の描写は、画像埴の図様とは大きく異なっている。また他の墳墓から出土している方相氏の姿も、画像埴とは全く異なるものである。方相氏である可能性は低いと考えられる。

鄭州出土のものと同館画像埴の人物を比べると、本館のものには、写し崩れがあることが分かる。腕を見ると、鄭州出土のものは、脛と同様に短い三角の剛毛が生えていて腕まくりした二の腕と分かるが、本館のその部分は、袖の線のようになっていて、腕として描かれていない。かなり似ているが、同じ型によるものではないことは明らかである。

実は、これに類した人物は、南陽の画像石のなかに相当数見られる。それは、弩弓の弦を引く兵士の姿で、中国の解説で「材官蹶張」（材官は武官の職名、蹶張は弩弓を引くこと）と呼ばれている（挿図4～9）。弩弓を足で押さえ、弦を力いっぱい引き上げている図で、口にはこれからつがえる矢を銜えている図で、墓室を守る兵士である。

これらの画像石が出土した南陽は、河南省の南西部に位置し、山東省と並んで画像石で知られる土地である。そこは、後漢を興した光武帝劉秀の出身地として知られ、漢代には人口も稠密な豊かな土地であった。また、三国志の劉備と諸葛孔明にかかわる（劉備が三顧の礼で迎えた時、諸葛孔明が隠棲していたとされる）地でもある。また、三国魏の曹操が、当地の厚葬の風潮に対して、厳しい禁止令を出したことが知られているが、南陽の墓から出土する画像石の多さは、曹操の禁令以前の当地の厚葬の状況を示しているといわれる。山東省の画像石が、儒教的な内容や歴史故事など、型にはまった主題や表現であるのに対して、南陽の画像埴は、神獣や鬼神が多く登場する、不思議な神話世界が表されている。それは、『山海経』にその一部が伝わるような、古代の奇妙で不思議な神獣や鬼神たちの跋扈する神話世界であるといわれる。その神話は、戦国時代から前漢の長江流域の文物に一部が残っている中国古代文明の古層の豊かさを伝えるものであり、南陽の画像石の図様も、その世界を淵源とするといわれている。

さて、これら南陽の弩弓を引く（蹶張）の兵士像と、本館の画像埴の人物を比べてみると、南陽の兵士には、足下には大きな弩弓が描かれ、口に矢を銜え、時に背中に矢を負い、頭には冠か甲を被り、甲冑に身を包むものもある。その描写法には、差があるが、彼らは一様に弩弓を力一杯引いている姿として表されており、武人と分かる。目が丸く大きく、デフォルメされた形態で、本館の人物の形に近い姿勢を示す。

だが、鄭州や本館所蔵の画像埴の人物は、姿勢は同じだが、弩弓と矢が失われ、もはや何をしているかは不明で、その姿勢だけを踏襲している。

また、南陽の画像石の蹶張の兵士には奇妙な容貌の者（挿図4、5、6-1、6-3）もいるが、鄭州出土や本館蔵のような、冠も被らず、坊主頭に放射線状にまばらな逆立った髪の毛の兵士は、見られない。南陽の蹶張図の一部に背面に矢を背負ったような図があり（挿図4）、髪と見えるものは、矢である可能性もあるが、その場合は、人物は坊主頭ということになる。漢代の一般の男性で、坊主頭や、頭に何も被らないことは考えにくい。鄭州出土の、本館蔵と同様の者を、異形の方相氏としたのも、そのような事情によるかもしれない。

いずれにせよ、基本的な図様としては、南陽の弩弓を引く兵士から、姿勢や、腕まくりした袖の膨らんだ表現や、脛や足の形などを踏襲しており、それが淵源にあることは明らかであろう。

この南陽画像石の蹶張の兵士と、本館の画像埴の間をつなぐものとして、本館蔵の画像埴（挿図1）の図様とはほぼ同じ図様をもつ画像埴が、天理大学附属天理参考館に所蔵されている（挿図10-1）。空埴の一面を切り取ったと考えられる板状の「押型鋪首守門空埴」（縦47.0cm横25.0cm）である。上部に鋪首と守門の二人の亭長、その下に本館蔵と同じ鳥と獣面人、人物と樹木、その下方に虎と野猪が向かい合う姿が表されている。上部の細身二人の守門の亭長は、南陽の画像石にも多く見られることから、この画像埴は南陽の系統に属すとみてよいだろう。縁飾は同様の幾何学文で、上方にも額縁のように施され、下方の縁飾は欠けてい

る。出土後に周囲を真っ直ぐに削ったと考えられている²。ただ、図様はほぼ同じでも、本館蔵のものと同型(同一のスタンプ)ではない。その図様は、微妙に違っている。全体として本館所蔵の埴は、線の明確さを欠き、形も崩れている。例えば、上部の朱雀と獣面人は形が崩れバランスが悪く、鳥は枠に対して大きすぎるため尾羽の一部や冠羽も描かれていない。弓を引く獣面人の左右の手の位置も開きすぎているため、この姿勢で弓を引くことは不可能である。中央の人物も、天理大学附属天理参考館のものは袖まくりして毛の生えた腕を表している(これは、鄭州出土品も同様)のに対して、本館の埴の人物では衣文の重なりのように表されている(挿図1、3、10-2)。これらは明らかな写し崩れである。

この挿図10-1の空埴が天理大学に収蔵された時期は、必ずしも明確ではないが、戦前に購入されたものであることは、間違いないとのことであり³、当館所蔵品の購入時期の1980年代よりはずっと早い。

天理大学附属天理参考館には、他にも多くの画像石や空埴が収蔵されており、その一つに、上記のものと図様が似た別の空埴(挿図11)がある。同様の幾何学文の縁飾りが四周にあり、さらにその外側にも斜行方格文が施されている。その上部に、本館の人物と同じような姿勢の二人の武人が表現されており、彼らは頭の上が尖った甲のようなものを被り、口に矢を銜え、足で弩弓を押さえて踏ん張って、両腕で力一杯弦を引いている。それは、先に挙げた南陽の画像石に数多く見られた弩弓を張る(蹶張)の武人と同類である。

この(挿図11)の二人の蹶張の武人は腕と脛を露わにして、棘のような体毛を表す点は、先の衛兵に近い(挿図10-2)。さらに、この二人の蹶張の図は、もう一つ別の天理大学附属天理参考館所蔵のより質のよい空埴(挿図12)をもとにして、写し崩れたものと考えられている。その弩弓を引く甲冑を着た二人の武人(挿図12)は、平面的な輪郭線で表した画像埴ではなく、レリーフ状の細やかな作りを見せており、制作時期は、前漢末から後漢初のものと考えられている。それを参考にした挿図11は、退化したもので、それより遅れる時期と判断されている⁴。とすると、さらに甲冑もなく、弩弓さえ消えた(挿図10-2)の図様は、それよりも時代が下るとされ⁵、鄭州の埴はさらに写し崩れが進み、本館のものは、それらよりも遅れた時期のものということになる。

天理大学附属天理参考館所蔵の(挿図10-1)の埴は、欠けはあっても本館蔵の埴より大きな画面として伝わっており、スタンプされた文様もくっきりしている。鄭州出土の先の方相氏とされた画像埴(挿図3)は、独立した小型の画像埴である。本館の所蔵の埴は、それのみで独立した画像埴として考え得るのか、もっと大きな空埴の一部であったのか、判断は難しいが、比較的厚みがあり、裏面がでこぼこしていることなどから、やはり空埴の一部であったとするのが妥当であろう。先に述べたように、人物や鳥や獣面人のみならず、幾何学模様や柏樹の部分を含め、線の崩れが目につき、相当に写し崩れが進んだ時期のものといわざるを得ない。

天理大学附属天理参考館の画像埴の出土地がどこなのかは知るよしもないが、鄭州で同じ図様の埴が出土していること、南陽の出土品には全く同一のものが見られないこと、ただ、図樣的には南陽の系譜を引くことから、南陽の図様の影響を受け、少し離れた鄭州あたりで後漢末に造られたものと推測できようか。

また、本館蔵の埴(挿図1)の上部の朱雀のような鳥と、それに向かって小型の弓を引く、耳の長い動物の頭と人の体をもった者の図も、天理大学附属天理参考館の(挿図10-2)と基本的に同じである。この鳥は胸を張って、かえって弓引く者に近づいていくように描かれ、弓引く方が、逃げながら振り返り弓を引いている。先に述べたように、本館蔵のその部分も、天理大学附属天理参考館の鳥や獣面人のポーズと比較して写し崩れが見られる。右側の獣面人は、『ひとものこころ』(第1期第3巻88頁キャプション)では、ねずみと呼ばれているが、本館のものは、耳が長く兎に近いように見える。

なお、この図(挿図10-2)は、天理大学附属天理参考館所蔵の他の画像埴に見いだすことはできなかった。本館のもう一つの画像埴、同じ所から出たと思われる小さい埴に表された大型の鳥は、この鳥と近い表現であり、このような鳥そのものは、他の天理大学附属天理参考館所蔵の漢代画像埴にも、南陽画像石にも、数多く見られ、仙界の鳳凰、あるいは朱雀と考えられる。

また、獣面人は、例えば前漢の馬王堆一号漢墓の木棺の漆絵に描かれた、雲気の間を自由に駆け回る弓を引く神獣のような者と鳥の図様を思わせる(挿図13)。彼らは、中国古代の神話的世界の住人であり、漢代以後

国教となった、「怪力乱神を語らない」儒教によって、上書きされたため、分からなくなってしまった乱神たちと考えられる。また、漢代には獣の頭の被り物をする雑伎などが行われており、それを表した可能性も指摘されている⁶。ただ、ここで行われているような、獣面人が鳥に矢を放とうとする場面が、何を表すのかについては、全く不明である。

なお、本館蔵の獣面人は写し崩れのためか、耳が長く兎のように見える。天理のものが正しい図様とすると、そちらは兎には見えない。もし、兎であれば、鳳凰や朱雀を太陽の象徴とすることがあるため、兎を月として、太陽と月にまつわる何らかの神話が描かれたと考えることもできる。鳳凰のような鳥と月で仙薬を搗く兎を描いた南陽の画像石(挿図14)もあり、その推測に関連するかもしれない。しかし、写し崩れが酷い図から、兎とも断定できず、たとえ兎であっても、具体的な説話を示すことはできないため、全く推測の域を出ないものである。また、太陽に弓引くものとして、すぐに思い浮かぶのは、10の太陽が一度に出て日照りになった時、天帝に命じられ一つを残して太陽を打ち落とした弓の名人羿の神話である。のち、褒美でもらった仙薬を羿の妻の嫦娥が一人で飲んでしまい、月に上って嫦娥一人が月に住むことになったという、その神話に関わる今は伝わらないエピソードがあったのか、これも憶測を重ねるものでしかない。

南陽やその周辺の画像磚に見られる、古代の豊かな神話世界を伝える不思議な図様は、様々な想像をかき立てるが、失われた神話世界に漠然と思いをさせることはできても、それらの図様だけで、失われたその内容を再現することは不可能であり、それを解く確実な鍵を見つけられないことは、残念としかいいようがない。多くの資料や出土品を総合して、その一部でも明らかになることを願うものである。本来、新しい考古資料や考古学研究を博搜し、参照し、少しでも解明できなければ、ここに報告すべきではないが、考古学研究には無縁の筆者の手には余るため、これまで知り得た先学の意見や、本館蔵の画像磚に関連する文物について簡単にまとめ、責めを塞ぐこととしたい⁷。

(実践女子大学香雪記念資料館 館長 宮崎法子)

付記

本稿執筆に際して、調査させていただいた天理大学附属天理参考館学芸員の青木智史氏には多くのご教示を賜りました。厚く御礼申し上げます。

註

- 1 周到ほか「図256解説」『中国美術全集 絵画編18 画像石画像磚』上海人民美術出版、1988年。
- 2 近江昌司「資料解説No.39」(天理大学・天理教道友社共編『ひとものこころ 天理大学附属天理参考館蔵品』第1期第3巻、天理教道友社、1986年) 202頁。
- 3 天理大学附属天理参考館学芸員青木智史氏の御教示による。
- 4 近江昌司「資料解説No.38」(同上) 201頁。
- 5 近江昌司「資料解説No.37」(同上) 201頁。
- 6 近江昌司 前掲註2。
- 7 本稿で使用した画像石資料の収集にあたり、香雪記念資料館非常勤職員(学芸補助)・河本理緒氏の協力を得た。

図版典拠

- 挿図3 常任侠主編『中国美術全集 絵画編18 画像石画像磚』上海人民美術出版、1988年、194頁、256図、河南省鄭州出土、原寸大15.0×8.0cm。
- 挿図4 南陽漢代画像石編輯委員会編『南陽漢代画像石』文物出版社、1985年、図118。
- 挿図5 南陽文物研究所・趙成甫主編『南陽漢代画像磚』文物出版社、1990年、図54。
- 挿図6 南陽漢代画像石編輯委員会編『南陽漢代画像石』文物出版社、1985年、左から図235、234、237、238、236。
- 挿図7 南陽漢代画像石編輯委員会編『南陽漢代画像石』文物出版社、1985年、図86。
- 挿図8 南陽漢代画像石編輯委員会編『南陽漢代画像石』文物出版社、1985年、図97。
- 挿図9 同上 図239。
- 挿図10-1 天理大学・天理教道友社共編『ひとものこころ 天理大学附属天理参考館蔵品』第1期第3巻、天理教道友社、1986年、89頁、図39。
- 挿図10-2 天理大学・天理教道友社共編『ひとものこころ 天理大学附属天理参考館蔵品』第1期第3巻、天理教道友社、1986年、88頁、図39-部分。
- 挿図11 天理大学・天理教道友社共編『ひとものこころ 天理大学附属天理参考館蔵品』第1期第3巻、天理教道友社、1986年、87頁、図38。
- 挿図12 天理大学・天理教道友社共編『ひとものこころ 天理大学附属天理参考館蔵品』第1期第3巻、天理教道友社、1986年、83頁、図37-部分。
- 挿図13 曾布川寛・谷豊信編『世界美術大全集 東洋編』第2巻、小学館、2002年、図56。
- 挿図14 長廣敏雄『南陽の画像石』京都大学人文科学研究所研究報告、1969年。



插图1 《画像砖》



插图2 《孔雀文砖》

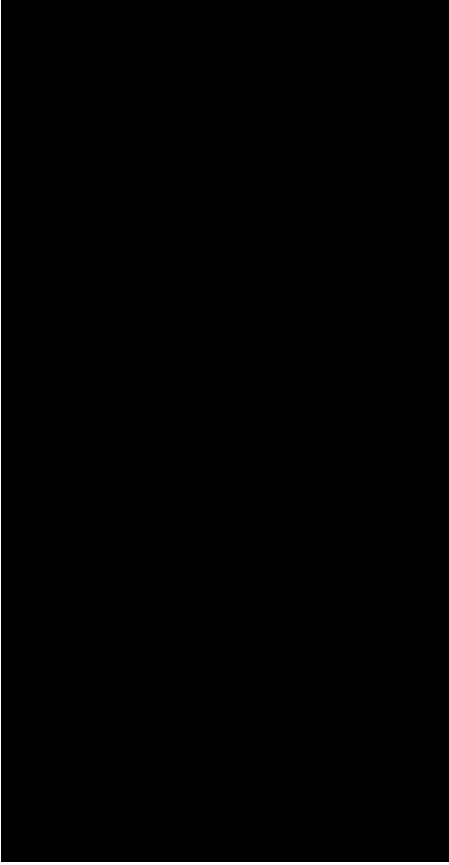


插图3 《方相氏画像埴》鄭州出土

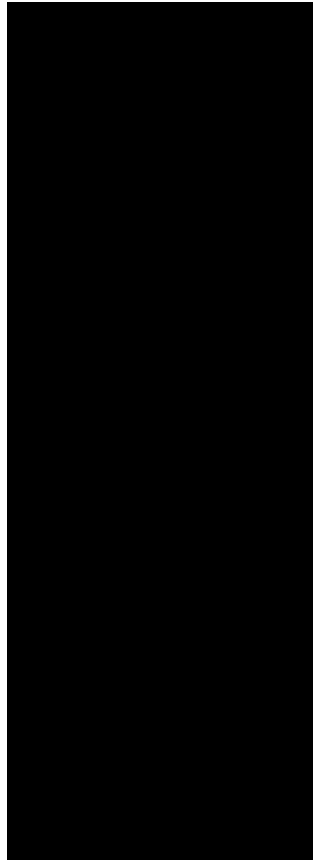
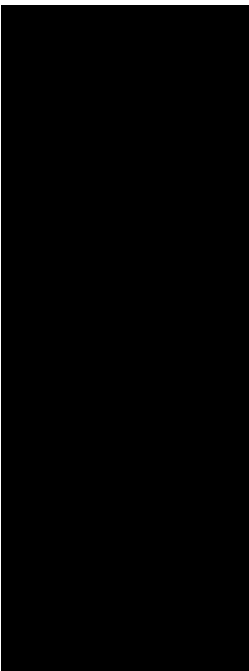


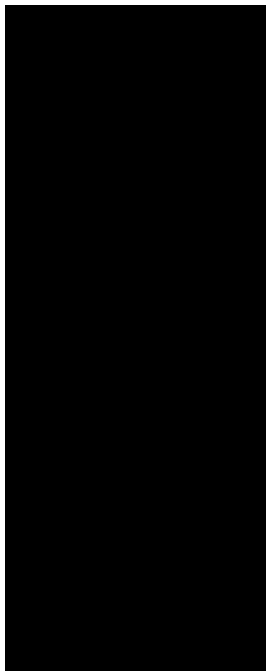
插图4 《蹶張》南陽漢代画像石



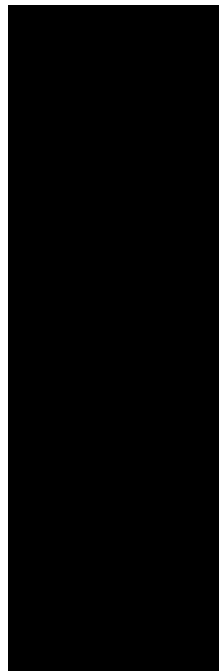
插图5 《蹶張》南陽漢代画像石



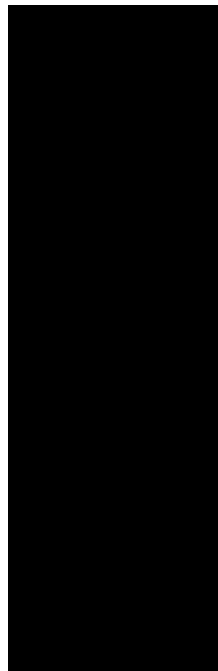
6-1



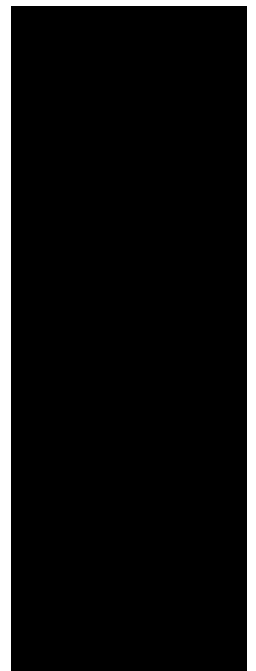
6-2



6-3

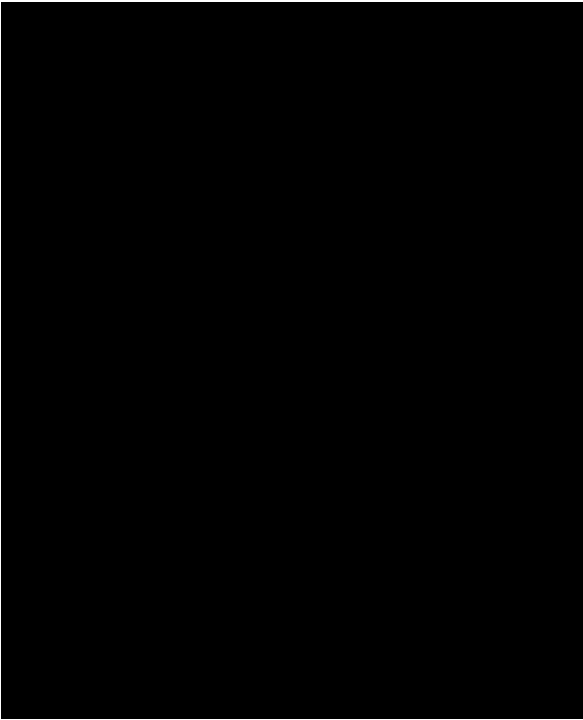


6-4

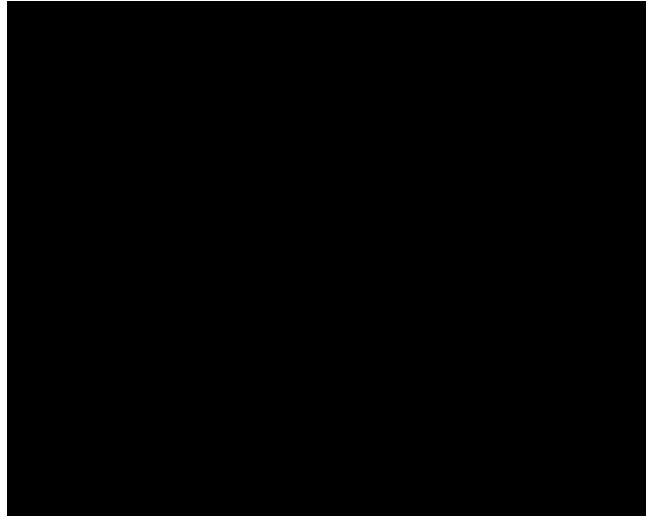


6-5

插图6（1～5）《材官蹶張圖》南陽出土漢代画像石



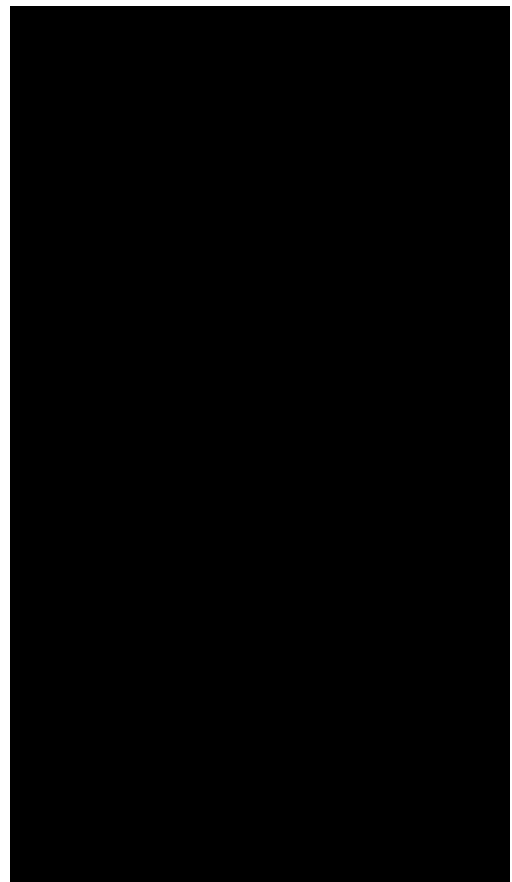
挿図7 《蹶張》南陽漢代画像石



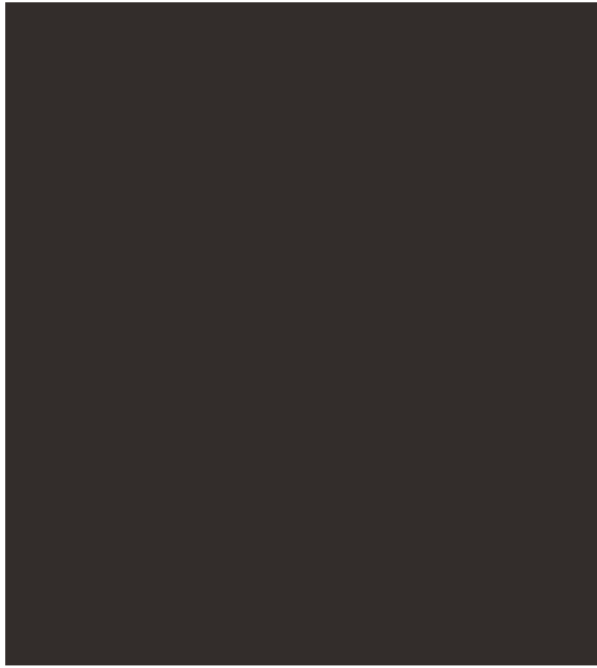
挿図8 《蹶張と斧をもつ人物》南陽漢代画像石



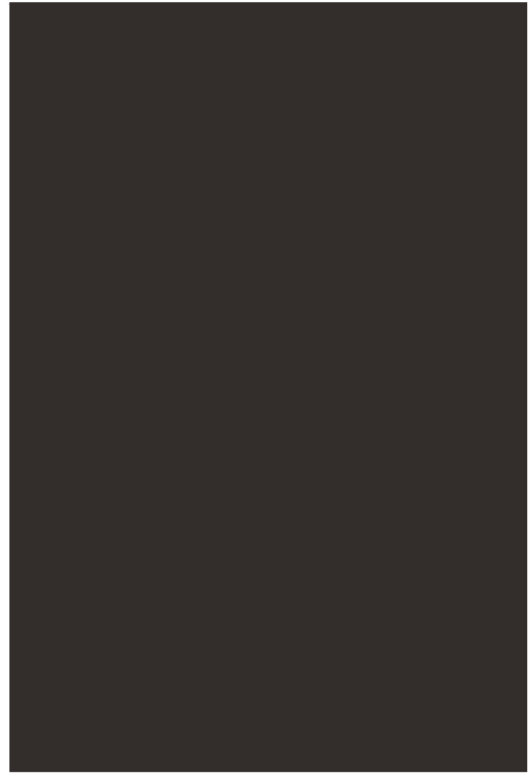
挿図9 《蹶張と楼閣》南陽漢代画像石



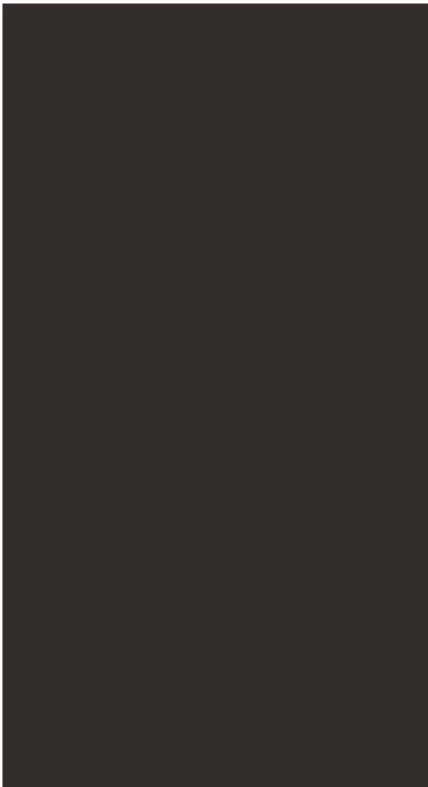
挿図10-1 《押型鋪首守門空罅》
天理大学附属天理参考館



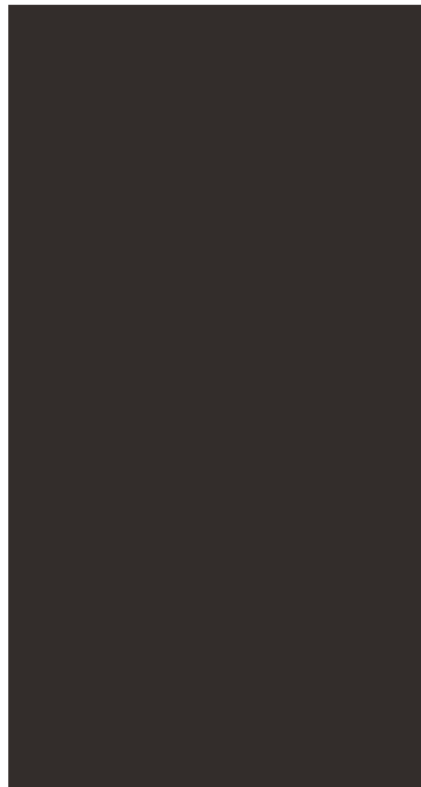
挿図10-2 《押型鋪首守門空磚》天理大学附属天理参考館



挿図11 《弩弓を張る衛兵磚》天理大学附属天理参考館



挿図12 《守門と蹶張衛兵》部分
天理大学附属天理参考館



挿図13 《馬王堆一号漢墓 木棺漆絵》部分
湖南省博物館



挿図14 《台上の二人物と鳥獸》
南陽漢代画像石